

卒業式

卒業生四十九名

三月一日(月)

本校体育館にて、令和二

年度卒業式が挙行されました。ご来賓並びに保護者のご列席のもと、四十九名の卒業生が本校を巣立ちました。



コロナ対策のため、在校生を入れず、保護者のご出席を一人と

させて頂くなど、制限を伴う式となりましたが、卒業生代表が涙ながらに感謝の答辞を述べるなど、厳かな中にも心温まる式となりました。

校長式辞(抄)

卒業生の皆さん、本校の三年間はいかがだったでしょうか。友達は、先生は、家族は、勉強は、行事は、アルバイトは、どんな思い出を皆さんに残していますか。この問いかけに、皆さんは様々な瞬間を思い出していることと思います。楽しい思い出がたくさんあって欲しいと私自身は思いますが、中には、あの時、ああしておけばよかったと少しの後悔を伴う思い出があるかもしれません。

「後悔先に立たず」とはよく聞く諺です。悔やんでも、どうすることもできなかった経験が皆さんも少なからずあることでしょう。そして、友人から、先生から、家族から、バイト先の上司から、「もっと準備をしておけばよかったね」と指導されたり、慰められたりします。用意周到に準備をして臨みなさい、そういう文脈で使われる言

葉です。

しかしながら、東日本大震災・原発事故からの十年、そして、コロナ禍での高校生活最後の一年で皆さんが経験しておわかりのように、皆さんがこれから生き抜く社会では、どれだけ念入りに準備をしたとしても対応できない予測不能、想定外があり、結果的に目標に届かない、目的が果たせないことも出てきます。「後悔先に立たず」という諺では到底括ることのできない想定外の結果を、私たちは否が応でも引き受けなければならぬ、そういう社会を私たちは生きていくのです。

さて、もう一度、本校での三年間を思い出してください。特に、この一年の非日常を。突然の休校、常時マスクの授業、ソーシャルディスタンス、短期決戦で臨んだ進路活動、そして形を変えざるを得なかった文化祭。用意周到に準備をしていたとしても、どうすることもできなかったことがいくつもありません。その時私たちはどうしたのか。思い通りに行かなかった結果ばかりに拘泥し、予測不能、想定外を恨み、嘆いていただけだったのでしょうか。

いいえ、私たちは、どんな結果であろうとそれを引き受け、それならどうするか、これからどうするか、常に前を向いて考えていたはずですよ。そして、皆さんにはその力があつた。用意周到に準備をし、ことに臨む、それは紛れもなく大切なことです。しかし、これからの社会を生き抜くためには、それだけでは足りません。準備をすることに臨み、その結果が、どんな結果であろうとも、そこから前を向いて考える。そこから必ず前に進む。このことを本校で学んだ力として忘れずに生き抜いてください。

仙田ノモ

卒業式まであと一週間。今日は入社前の説明会と支給される制服の採寸日。係の人から採寸用の制服を渡されて、更衣室に入る。鏡に映った私は、着慣れたセーラーを脱いで、ふんわり感のある紺のフレアスカート、オープンカラーのブラウスに、紺のベストを着て私自身を見ていた。これが四月からの私。鏡の中では社会人の私の横でハンガーに掛けたセーラーが揺れていた。

「どうだった？説明会」ママがいつもの口を聞きながら、私に聞いた。今日は卒業ソング特集らしい。「どうって、いろいろな部署を回って最終的な配属を決めるって言われた」「そっか、いよいよだね」そう言っただけでママは私をしばらく見つめていた。

「え、なにになに」「いやあ、セーラーも見納めかと思って」しんみりと呟いたと思っただけで、急に「あ、社会人になったらお給料から食費入れてもらうからね〜」って。はいはい、わかっていますって、まったく現金なママ

卒業式が終わり、拓哉と紗英と私、三人で帰り慣れた道を歩く。式の終わり頃に降り出した雨が、校門の桜のつぼみを濡らす。入学式の時、満開だったことを思い出した。紗英は仙台の大学、拓哉は東京の専門学校、今年咲く桜を見るのは私一人か。

「どうした？有紀」拓哉が気づいた。「ちよっと、しっかり傘を差してよ、髪が濡れちゃうじゃない。」髪をぬぐうふりで誤魔化した。「おまえさ、傘忘れておいて…」「雨予報でも傘持っていないのが有紀よ」笑いながら紗英が助け船を出してくれた。「まったく、二人とも俺の扱いひどくないから、ま、それも今日が最後…」言いかけて拓哉が口をつぐむ。

三人黙ったまま、いつものコンビニの角に着いた。「じゃ、またな」拓哉がいつものように行くところを、紗英が引き留めた。「私、コンビニで買いたいものがあるから二人でここで待ってて」「だったら、俺たちも行くよ」「いいからいいから、待

ってよ」小走り、紗英がコンビニへ向かった。

拓哉と二人っきり、一つの傘に取り残された。たぶん、紗英の優しさ。「拓哉、バレンタインは驚かせてごめんね。」「…ああ」「気持ち伝えて超すっきり。私らしいでしょ！」半分嘘をついた。友達以上の好きにはなれないってあの日拓哉に言われ、私は大泣きした。泣けば拓哉への気持ちに踏み切りがつくと思ってた。すっきりするのが私らしさ。でも、そうはならなかった。

急に雨が強く降り出した。雨の音に囲まれて、世界に二人だけって感じがした。拓哉と一つの傘、あの日のネックウォーマーのように、なぜか温かい。もう一度、ここで告白したら…。それでも、きっと、拓哉の答えは変わらないだろう。伝えなまま…、大人の選択。

雨について、紗英が戻ってきた。手には缶コーヒーマスターが三つ。「おい、ブラック無糖って」「大人になるんだからいいじゃない！卒業にカンパニー」三人そろって、口をつける。ほろ苦い。大人の味。大人の選択。「苦くてほんと泣けてくる。じゃ私行くね」ここから先は、拓哉と紗英の道。「おい、傘」呼び止める拓哉に、「いらなーい、濡れて帰る」と言っただけで、私は一人走り出した。

- ♪ 桜が枝に咲く頃は違う世界で
 - ♪ ひとりぼっちひとりぼっち生きてる
 - ♪ 雨に濡れたメモには東京での住所が
 - ♪ 握りしめて泣いたの
 - ♪ そうこのままでいいの
 - ♪ ただのクラスメイトだけで
 - ♪ 失うとき初めて眩しかった時を知るの
- (作詞 松本隆「制服」歌 松田聖子)

校長のしぐさ

主人公が卒業したので小説は最終回です。新年度からは、小説以外も書いてみようかと考えていますが、どうなることやら。

(本紙中のイラストは「いらすとや」WEBよりお借りしています。)

制服 松田聖子

